

虎ノ門のはじまり

森記念財団研究員

脇本敬治

2014 年に虎ノ門ヒルズが完成し「虎ノ門」の言葉が盛んに取り上げられたので、虎ノ門が東京のどこにあるのか調べた人は多いと思う。虎ノ門と聞くと、現在では地下鉄の駅名を思い浮かべる人、あるいは病院を思い浮かべる人が多く、港区の町名だと答える人は少ないかもしれない。虎ノ門地区は港区の北東部分にあり、千代田区の霞が関に接しており、地下鉄虎ノ門駅から約 1 km 北には皇居のお濠、同じく約 1 km 東には新橋駅がある。さらに虎ノ門駅の南西方向には六本木駅があるので、大まかにいうと皇居の南で、新橋と六本木の間に広がる地域が虎ノ門である。

虎ノ門ヒルズの下にはトンネルが通され、環状二号線と新虎通りが新しい幹線道路として同じく 2014 年に完成した。環状二号線・新虎通りは 2020 年の東京オリンピックの会場を結ぶ通りとして期待され、また周囲では大規模な開発が予定されている。しかし、虎ノ門付近は新橋や六本木ほど強い印象がある所ではないようだ。いわば眠れる虎の状態ともいえる。東京は今後ますます海外とのやりとりが増え、新たに訪れる外国人も増えることが予想されるため、この場所はこの様な所なのか、地域の由来や特色を表現することが重要になってくる。そこで今回は開発が進みつつある虎ノ門の地域の成り立ちと、その性格、いわば虎ノ門らしさを何回かに分けて掘り起こしてみようと思う。このことはまた、地域の環境や価値を維持・向上させる取組みであるエリアマネジメント活動にもつながるからである。



明治時代初期の江戸城虎之御門（Wikipedia）

虎ノ門の地名は虎の門交差点のやや北側、文部科学省前あたりにあった、江戸城外堀の虎之御門に由来する。慶長 11 年(1606)に石垣が、寛永 13 年(1636)に門が工事された虎之御門は外堀に位置した枡形門で、周囲は防御のため石垣で固められ、通過するときは L 字型の通路を抜けるようになっていた。明治初期の写真を見ると屋根のついた立派な城門である。手前には橋が架けられ、溜池からの水が堰から滝のように外堀に落ちている。明治 6 年(1873)に枡形門は取り除かれてしまったが、現在でも周囲には外堀の石垣の一部が残されている。地下鉄虎ノ門駅の文部科学省への連絡通路に石垣と使われていた石が展示され、また、虎の門三井ビルの庭の一角には隅櫓が置かれていた石垣の一部が残されている。歩道から三井ビルの庭の中に入ると石垣を見ることができるが、その大きさに驚かされる。

虎ノ門の名は虎之御門が取り除かれた後も市電の停留所名として残り、昭和 13 年(1938)に開通した銀座線の駅名にもなった。町名となるのは昭和 24 年(1949)に芝今入町が芝虎ノ門と改称したのが最初である。その後昭和 52 年(1977)に住居表示が実施され、神谷町に至る桜田通りの周辺の地域を虎ノ門一丁目から五丁目として定めることになったが、意外なことに町名としてはそれほど古いものではない。



地下鉄虎ノ門駅 11 番出口にある外堀の地下展示室



外堀通り虎の門三井ビルの前にある溜池櫓台跡

なぜここに、立派な城門が置かれたのだろうか。虎之御門を通っていたのは古代からの主要な街道だったからだといわれている。この街道は奥州に通じるものだったため、虎之御門近くに日本武尊が蝦夷のために関所を設けたとの伝説が残されている。雲や霞を隔て遠くまで眺めがよかったため霞が関と名付けられた一帯は、平安時代には和歌に読まれる歌枕となり、また江戸時代には広重の名所江戸百景に選ばれて「かすみかせき」の浮世絵が何枚も描かれている。霞が関は現在では官庁街になっているが、眺めの良さが知られた風雅な場所であったのである。



広重「かすみかせき」『江戸名所百景』（国立国会図書館デジタルコレクション）

霞が関を南下した街道は飯倉交差点の丘を越え、古川を渡り、三田から高輪にかけての丘陵の尾根道を進んだとされている。三田の尾根道の南側には、更級日記に出て来る「竹芝寺」の跡とされる亀塚公園と済海寺がある。菅原孝標女が更級日記を綴ったのが 1020 年頃とされるので、およそ 1000 年前には上総と京の都を繋ぐ街道として使われていたことが分かる。

古代からの街道は鎌倉時代になると、鎌倉と上総や下総を結ぶ、最も海辺に近い主要道「下道（しもつみち）」になっていったと推定されている。室町時代の 1457 年に江戸城を築いた大田道灌もまた、このルートを使っていたようである。飯倉の交差点の南側の平らな部分は、道灌が江戸城から出陣する際に兵馬をそろえた「勝手が原（かつてがはら）」の名前が残っている。

この街道は北条氏が小田原城を築き、小田原が関東の重要な都市になると、小田原と江戸を結ぶ小田原街道と呼ばれるようになった。小田原街道は相模の国と江戸を最短距離で結ぶように整備されたため、江戸時代に東海道が新しく通された後も、江戸と小田原方面を結ぶ主要街道として利用された。江戸時代には家康が平塚に設けた中原御殿を結ぶことから「中原街道」と呼ばれるようになるが、沿道の農産物の運

搬や旅を急ぐ人にとっては最短最速のルートだった。中原で生産された成瀬酢は江戸時代に品質が高く評価され、この街道を通して将軍に献上されていたため中原街道は「お酢街道」とも呼ばれていた。



更級日記の竹柴寺由来の土地であることを記した亀山碑

古代から街道として利用されてきた道路は、現在は桜田通りとして港区内を縦断している。国道 1 号線の番号が振られているように、現代でも主要道である。江戸は将来にわたって王城として繁栄するように、四神相応の思想、すなわち北の玄武、東の東龍、南の朱雀、そして西の白虎に守られるように造られてきた。それゆえ、古代から西の国々とつながる街道に置かれた城門は虎ノ御門とされたのだろう。現在の虎ノ門地区はこの桜田通りを取り囲むように広がっている。そこに新たに通された環状二号線・新虎通りは、虎ノ門を南東に横切り、開発が進む東京の臨海部と虎ノ門を結ぶことになる。虎ノ門には、国際空港や臨海部を結ぶバスターミナルが 2020 年に完成する予定なので、多くの国とつながることになり、臨海部だけでなく海外からも来やすい場所になるだろう。日本では海からの南東の風は良い縁や発展をもたらすといわれている。虎ノ門から南東にあたる臨海部と繋がること、さらには海外と繋がることは、虎ノ門、そして東京にますますの発展をもたらすことになるのではないだろうか。



虎ノ門地区と環状二号線・新虎通り（Google マップより作成）

参考：森記念財団『古川物語』1992、鈴木理生『江戸と城下町』1976、北倉庄一『中世を歩く』1998、
 『港区史』1960